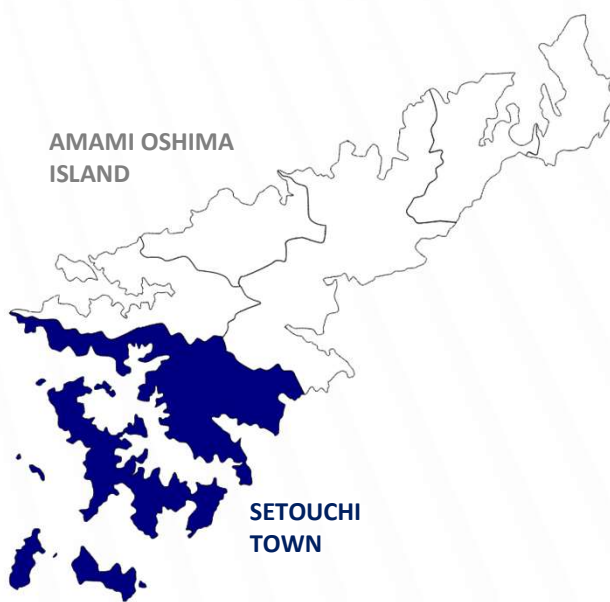


せとうち未来展望2050

人と海と山を育み、活かし、つなぐ瀬戸内町



町長あいさつ

瀬戸内町は、奄美大島最南部に加計呂麻島・請島・与路島の有人三島を含めた広大な面積を行政区域に持つ町で、これまでに産業の発展、人口減少対策、福祉政策等、あらゆる施策の実施のために諸計画を作成し、取組んでまいりました。

これまでの諸計画づくりについては、実績を基に計画を策定する「フォアキャスト方式」を用いて策定してきましたが、近年の情報通信技術、人工知能、DXなどの急速な進展は、私たちの生活に変革の時を迎えているのではないかと思います。

このような状況を鑑み、今回の構想策定は、2050年にどのような町でありたいかを中高生、町民、各団体等、町民みんなで瀬戸内町の特徴と課題、また町民アンケートを参考に、暮らし・教育・産業・社会基盤・文化・自然等についての7つの将来像を行政と町民の共通言語として揚げ、その将来像を実現するために今から何をすべきかを考える「バックキャスト方式」で行いました。

これからは、この7つの将来像を実現するために何をしていくかを念頭におき、瀬戸内町長期振興計画等、町の諸計画を策定し、今後とも町民の皆様のご意見、ご提言を頂きながら、持続可能で豊かな瀬戸内町をともに創っていきたいと思います。

終わりに、本構想の策定にあたりまして、策定委員会、ワーキンググループ、未来ワークショップ、町民アンケートにご協力くださいました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

令和6年3月

瀬戸内町長 鎌田 愛人

目次：せとうち未来展望2050

1. せとうち未来展望2050について

- | | |
|--------------------|---|
| (1) 策定の趣旨 | 4 |
| (2) 策定の経緯と全体構成 | 5 |
| (3) 行政運営の指針となる未来展望 | 6 |

2. 瀬戸内町の可能性

- | | |
|----------------------|----|
| (1) 瀬戸内町の今 | 7 |
| (2) 瀬戸内町の特徴と可能性 | 10 |
| (3) 考えていくべき、世界や社会の変化 | 12 |

3. 瀬戸内町の未来展望

- | | |
|---------------------------|----|
| (1) 未来展望の考え方 | 15 |
| (2) 7つの将来像 | 17 |
| 将来像①（地域社会、暮らし） | 18 |
| 将来像②（教育） | 19 |
| 将来像③（産業） | 20 |
| 将来像④（社会基盤） | 21 |
| 将来像⑤（文化・民族） | 22 |
| 将来像⑥（自然・環境） | 23 |
| 将来像⑦（町全体・行財政） | 24 |
| 未来展望の概説（2050年の世界や日本と瀬戸内町） | 25 |

4. 実現に向けて

- | | |
|-------------------|----|
| 未来展望の実現に向けて今必要なこと | 28 |
|-------------------|----|

1. せとうち未来展望2050について

(1) 策定の趣旨

瀬戸内町の将来を考え、町民と行政がともに行動していく出発点

本構想は、町民一人一人、企業、地域団体、NPO等の民間団体、行政が一体となって、将来を展望し、瀬戸内町の未来やありたい姿を考え、町民の暮らしを豊かにしていくための目標を、2050年の将来構想として「せとうち未来展望2050」（以下、「本構想」という）を策定し、みんなで行動を起こしていくための出発点にしようとするものです。

2050年は、化石燃料に頼らない社会になるという（カーボンニュートラル）、世界的な目標があります。その社会の移行期においては、予想できない技術革新や社会の変化が起こる可能性があります。近年のAI（人工知能）やICT（情報通信技術）などの急速な進展によって、近い将来、より多様で柔軟な暮らしや働き方を実現する可能性が高まり、私たちの生活は変革の時を迎えています。

一方、2021年に奄美大島が世界自然遺産に登録されたことをきっかけに、奄美大島に国内外から観光客数の増加が見られ、新しい観光宿泊業が萌芽し始めており、瀬戸内町が変わろうとしています。

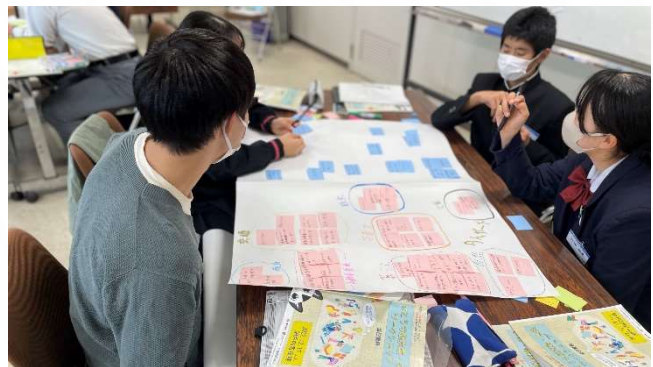
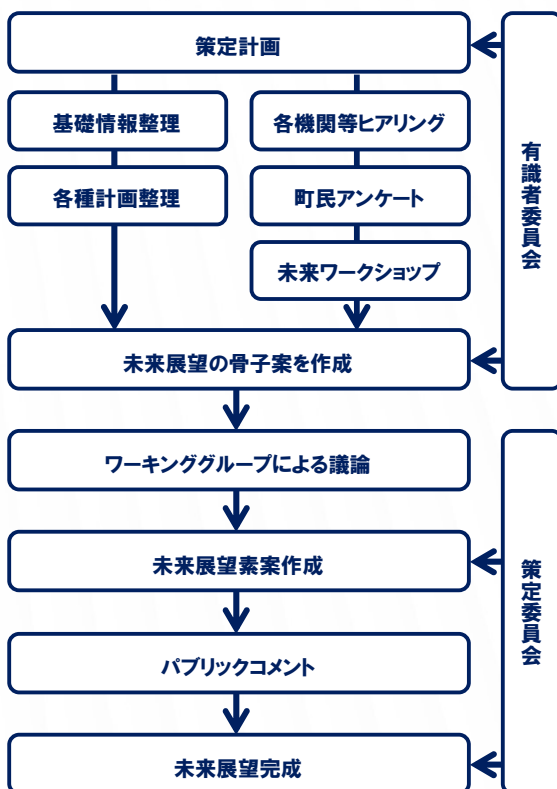
2050年にこの町の主体になるのは、現在の20代以下の若者とその子供たちです。その瀬戸内町の望ましい将来を、これから町民みんなで作るための未来展望が、本構想なのです。

町民、企業、民間団体、行政が一体となって歩みを進め、なりたい瀬戸内町をつくることを、自分事になるよう、周知と理解浸透のため、議論を進めていきます。本構想は、予想できない社会の変化に応じて見直すことを前提としています。

(2) 策定の経緯と全体構成

町の人々の想いをカタチに

本構想が描く瀬戸内町の将来像は、町民自らが望み、思い描くものであるべきです。そこで、下図に示すように、アンケート、ヒアリング、中高生を対象とした未来ワークショップ、町民の代表によるワーキンググループ等を通じて、町民が、地域の課題や望む将来の暮らし、生業の姿などについて町民の声を集めました。



未来ワークショップ事前授業

未来ワークショップ

役場職員未来ワークショップ①②

町民によるワーキンググループ①②③

役場職員によるワーキンググループ①

未来展望の全体構成

近年、社会経済情勢や技術動向の時代の変化が大きくスピードが上がっているため、これまでのように、過去から現在を起点として未来を予測する方法が難しくなっています。そこで、未来展望の作成にあたっては、町民が、2050年のありたい姿（将来像）を描き、そこに至るまでにどのような課題があり、何に取り組むべきかを議論、検討してきました（※）。

この中では、瀬戸内町を取り巻く課題や特徴、可能性を分析したうえで、瀬戸内町が「どのような方向に向かって進むか」、また「その方向性に向かってどのようなことをすべきか」を整理しています。

そして、ありたい姿（将来像）が具体的にイメージできるよう、7つの将来像を設定しています。

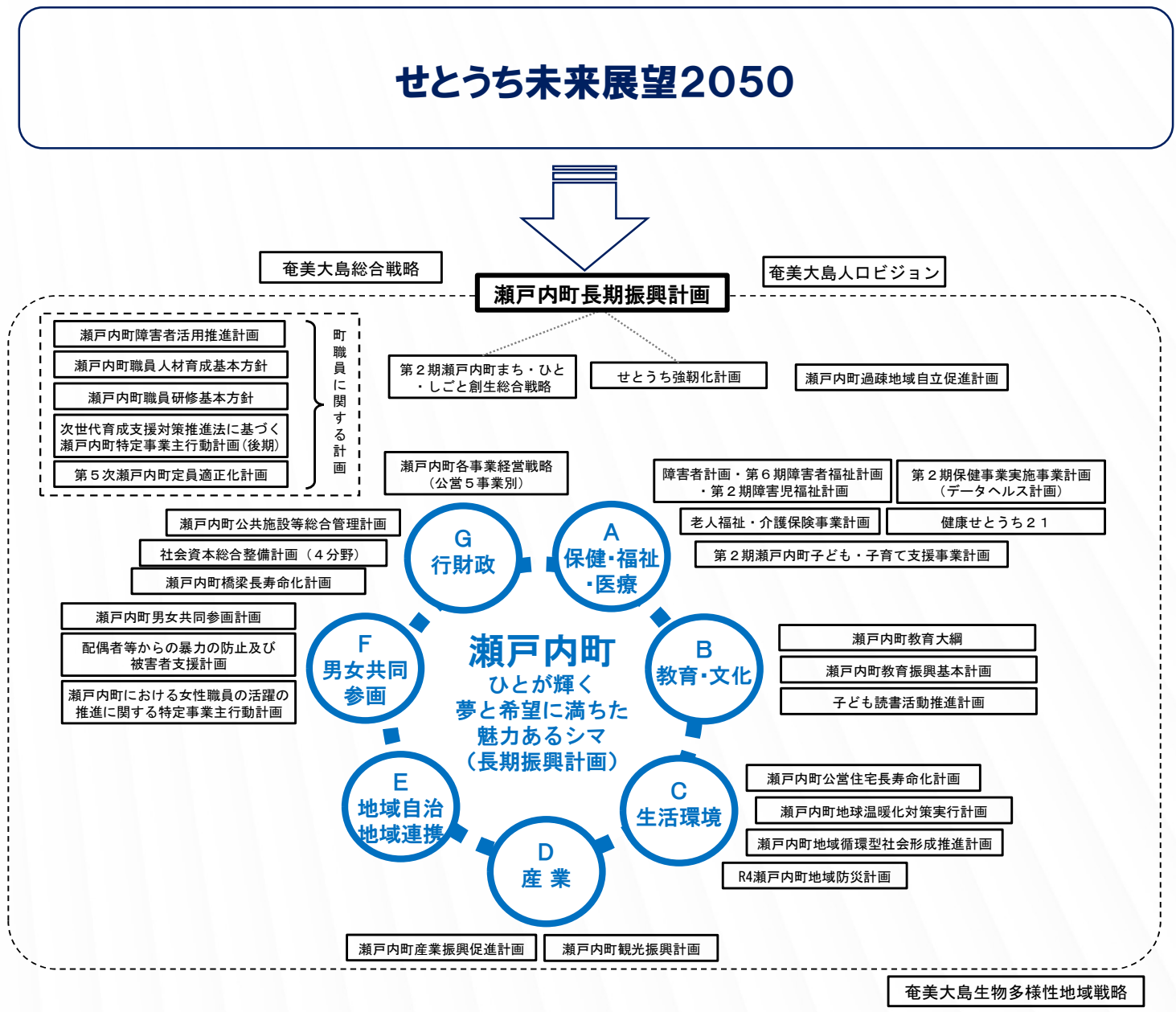
※ 過去から現在を起点として未来を予測する方法である“フォアキャスト”に対して、理想の将来像を描き、そこから逆算して何に取り組んでいくか検討していく手法を“バックキャスト”といいます。これは、世界的に環境問題が多く発生した際、環境問題解決のため迷うことを低減するための考え方で、フォアキャストと同等に重要とされます。本構想の策定にあたっては、バックキャストの手法をとりいれています。フォアキャストとバックキャストの両面からアプローチすることで、理想の将来像と現状とのギャップを明確にし、道筋を見失うことなく本構想の実現を目指します。

(3) 行政運営の指針となる未来展望

各計画から参照される未来展望

本構想は、瀬戸内町が目指していく将来像を町全体で共有するもので、これからの行政運営の指針となるものです。本構想をもとに「瀬戸内町長期振興計画」及び「各政策分野の個別計画」を策定し、実行してまいります。

せとうち未来展望2050



2. 瀬戸内町の可能性

(1) 瀬戸内町の今

豊かな自然と文化が土台にある町民の暮らし

瀬戸内町は、奄美大島の最南端に位置し、大島海峡をはさんで加計呂麻島、請島、与路島の有人3島があります。町の面積の約87%は山林で占められ、300~400mの山岳地が連なり、急傾斜が海岸に迫っています。海岸線は典型的なリアス海岸を形成し、水深の深い入江が多く、水産業や避難港としても利用されています。

この傾斜地を縫うように、沿岸に56の集落が点在しており、各集落が特徴的な生活様式、文化を有してきました。

気候は亜熱帯海洋性で、年間を通して温暖多雨であり、台風の常襲地帯となっています。変化に富んだ地形、広大な森林、長大な海岸線と深浅の変化がある海洋があり、そこに様々な生き物が暮らしています。

瀬戸内町は、この豊かな自然を土台に、悠久の歴史の中で文化・民俗が形成され、産業活動が展開されています。

経済の視点では、相対的に建設業の規模が大きく、水産業、公務、そして医療福祉が続き、現在、観光に関連する産業の規模はそう大きくありません。

このままいくと予想される変化

瀬戸内町の人口は減少し続けていて、年齢階層別人口割合は、老年人口（65歳以上）38.1%、生産年齢人口（15 - 64歳）49.7%、年少人口（0-14歳）12.2%と、少子高齢化が進行している現状にあり、2050年には生産年齢人口が約半数の2,000人程度まで減少する見込みです。2060年には現在の総人口が3,614人になるという推計があり、2015年からの減少率は60%に達する見込みです。

そうなると、働く人の数が減り、農林水産業の担い手が不足します。シマ（集落）の人数が減少し、医療・福祉、買い物、公共交通、行政サービスなどの生活環境を維持することや、大切な集落の文化を継承することが難しくなります。瀬戸内町の歳入は不足し、道路や水道など社会基盤の維持管理が難しくなっていきます。

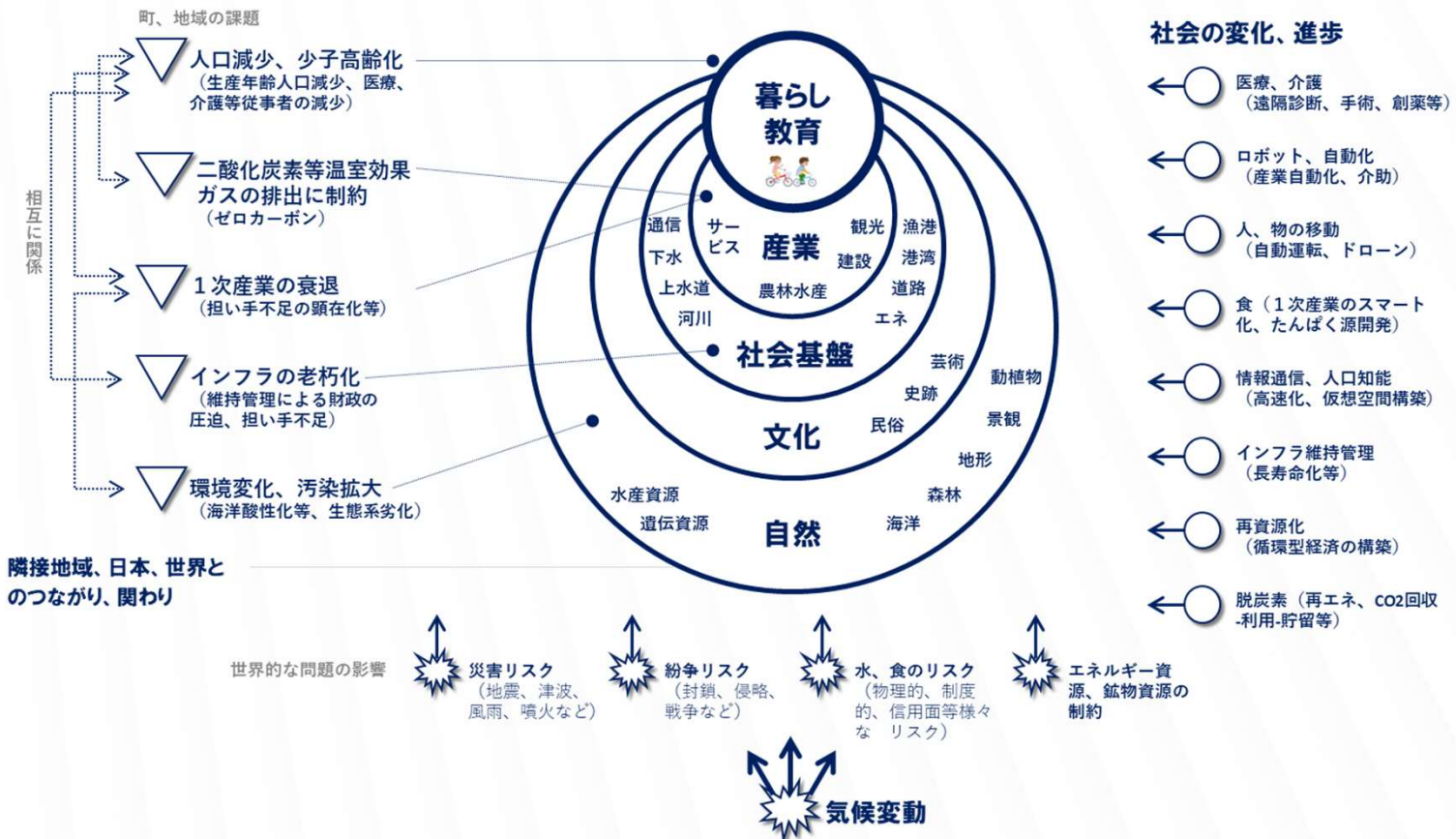
その他にも、気候変動の進展に伴う災害の頻発、甚大化や、水、食料やエネルギーの不足など、外的な要因によって町の暮らしに様々な影響が生じることが懸念されています。

チームせとうちの挑戦！

以下の図は、瀬戸内町の社会構造（暮らし、教育、産業、社会基盤、文化、自然）を示しており、左側に、人口減少、少子高齢化、化石燃料の使用の制約、産業の変化、インフラの老朽化などの町が抱える課題、右側に社会の変化や進歩が急速に進む事象を、下には、気候変動による災害リスクなど、これから直面していく大きな変化を表しています。

そのような変化を見据え、未来を展望し、ありたい姿を描き、今から行動することにより、未来を望ましいものに変えていくことができます。そのためには、世界や社会の変化をとらえ、町民や行政が意識や価値観をうまく変化に適合させ、自ら行動していくことが重要です。

幸い、私たちの足元には豊かな自然があり、将来の暮らしの安全・安心を保ち、むしろ豊かにする地域資源が存在しています。ここで、瀬戸内町の町民全体が、それぞれの視点や立場で現状の課題に向き合い、将来の予想を変えていく挑戦をしていきましょう！



これから町が向き合っていくこと

では、望ましい未来を実現するには、どんなことに向き合っていく必要があるのでしょうか。本構想を策定するにあたり、4ページに示す策定プロセスにあるように町民からの意見をまとめた結果、様々なことに向き合っていく必要があることがわかりました。これらの中には、長期振興計画にも挙げられている、眼前の課題も多くあります。

これから瀬戸内町は、未来展望を描き、そこから逆算して様々な取組を進める中で、下記のようないわば分野別の目標に向き合い、その達成に挑むことが重要となります。

瀬戸内町が向き合う分野別の目標

横断的な目標

- ・ 少子高齢化の緩和、関係人口増加
- ・ デジタル技術の活用（町全体の効率化、価値向上）
- ・ 余裕のある財政の実現
- ・ 集落維持、相互扶助機能の維持向上
- ・ 経済の活性化、地域振興の実現

産業に関する目標

- ・ 雇用創出、労働力の確保
- ・ 森林、農地、海洋の保全（恵みの享受の維持、価値創出）
- ・ 水産業の効率化、高付加価値化
- ・ 観光業の振興実現
- ・ 空き店舗の活用実現

社会基盤に関する目標

- ・ 災害に強いまちづくりの実現
- ・ 再生可能エネルギーの活用実現
- ・ カーボンニュートラルの達成
- ・ 移動の効率化実現（フェリー欠航の減少等）
- ・ 住居確保（企業誘致の実現）
- ・ 空家の減少、景観向上
- ・ 汚染対策、自然環境の保全

自然・環境に関する目標

- ・ 生物多様性の保全
- ・ 美しい景観の保全、創出
- ・ カーボンニュートラルの達成（森林、海洋の活用による貢献）

社会・暮らしに関する目標

- ・ 医療施設、人材の拡充
- ・ 介護人材の確保
- ・ ジェンダー平等の実現
- ・ 子育て支援の拡充、公園等子供が遊ぶ場所の拡充
- ・ 商店街の活性化

教育に関する目標

- ・ 町をリードしていく人材の育成（行政、産業人材の育成）
- ・ 保育施設、一時預かり等の人材育成
- ・ 古仁屋高校への入学率向上
- ・ 地域資源を活用し、子供が主役の教育の実現
- ・ 特に、自然について触れる機会の拡充

文化・民俗に関する目標

- ・ 文化財の保全、教育、観光等への積極活用の実現
- ・ 文化・民俗の伝承、継承（例：島唄）
- ・ 伝統工芸の維持、継承（例：大島紬）
- ・ 文化活動の振興
- ・ 楽しいものを残す、新たに創造する（例：イベント、豊年祭、シーカヤックマラソン、八月踊り等）

未来展望を描きチャレンジする
（チームせとうちの挑戦）

(2) 瀬戸内町の特徴と可能性

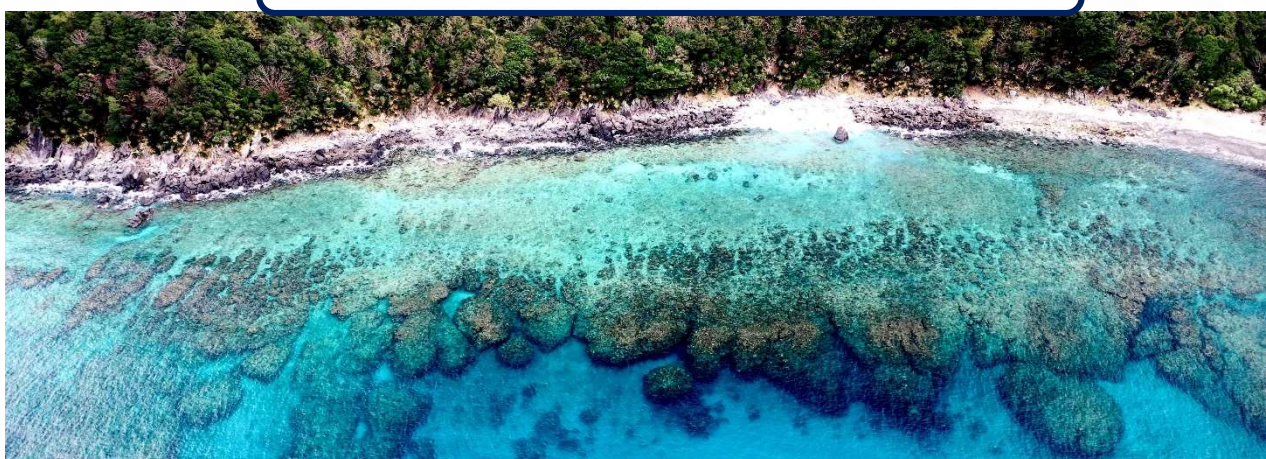
宝の島、宝の町

瀬戸内町には雄大な自然が広がっています。町民は、それを大切に、誇りに思っています。町に広がる森林、美しい海は、2050年という将来を考えた時、水産物や農産物の確保の場、観光や教育の場、二酸化炭素の吸収源になるだけでなく、未利用の資源が眠っている可能性もあり、これは、町の宝と言っても過言ではありません。そして、瀬戸内町には独自の文化と民俗が存在し、多くの文化財が存在しています。

まさに、瀬戸内町には多くの宝があり、これを「地域資源」としてうまく活用する未来展望を描き、それに向けて挑戦していけば、2050年も町民の暮らしを安全安心で豊かにできるはずです。



地域資源 = 森 × 海 × 文化



広大な森林

瀬戸内町は、町の面積の87%が森林に覆われています。そして雨が多く降り、森林が奄美の多様な生態系の保全にとって非常に重要な場所になっています。木質バイオマスの供給や二酸化炭素の吸収源となるだけでなく、癒しや学習の場としての活用など、多面的な機能を持っていて、2050年の将来に向けて、「自然資源」としての価値が高まっていきます。

日本一長い海岸線を有する美しい海

瀬戸内町は、全国の市区町村の中で日本で一番長い海岸線を有しています。そして、日本で唯一、町の中に海峡があります。海岸、沿岸には砂浜、藻場、磯場、珊瑚など様々な環境があり、海中は深度や流れによって、海底も地形や礫、砂、粘土などの底質によって環境が異なっていて、そこに、「潜れば潜るほど新種が見つかる」と形容される生態系が展開しています。

これは、学術的な研究の対象として価値が高いだけでなく、水産資源の保全や、未利用資源による新たな産業創出に道を拓く可能性があり、二酸化炭素吸収の場としての期待が高まっています。

これらが知的好奇心を刺激するとともに、観光資源であることは間違いありません。癒しを与え、時間を忘れられる海は、大変貴重でしょう。

独自の文化、民俗と歴史

奄美大島には、「島唄」や「諸鈍シバヤ」などの受け継がれてきた民俗、文化があり、他者を思いやる結いの精神が宿っています。古くは琉球文化の影響を受け、江戸時代以降は薩摩の文化が流入し、他にはない文化・民俗が形成され、独自のアイデンティティが存在します。

実際、海沿いに点在するシマ（集落）には、埋蔵文化財が多く確認されており、その調査研究が進められて、教育への活用も図られています。そして、戦史も多く存在し、国際的な緊張が高まっている今、平和について考える貴重な材料をもたらしています。

町には世界の人々が欲しいものがある

瀬戸内町には世界の人々が欲しがめるものが凝縮されていると言えます。この地域資源を活用することで、水産業の高付加価値化や観光業の育成、教育活動や関連するツーリズムの活発化など、大きな未来展望が描けます。ドローンの活用など、これから普及していく先端技術を取り入れていくことで、移動手段の制約を克服し、その視界はひらけます。そのため、町外の人々と連携し、町の宝である自然と文化の保全、活用をバランスよく進めていくことが必要です。本構想を作成する今、この意識をもって未来に向かっていきましょう。

(3) 考えていくべき、世界や社会の変化

2050年の世界

「せとうち未来展望2050」の目標年である2050年の社会では、暮らし、教育、産業などをより便利、快適にするための技術が進歩し、これを生かした社会問題を解決する新しい取組が進むと考えられます。一方、気候変動、自然資源の減少、国際関係の変化など、世界的な課題が日本、そして瀬戸内町の将来に影響します。

世界が激動していく中で、日本が目指していること

2050年に向けて、世界中で形成されるデジタル経済圏は、企業の活動や個人の生活に浸透します。国際関係では、中国が米国の経済に並ぶ一方、インド経済の台頭が言われています。

科学者によれば、世界が目指している2050年にカーボンニュートラル社会になったとしても気温は今より上昇し、気候変動による異常気象の増加、自然資源や生物多様性の減少など、長期的に様々なリスクが予想されています。日本は、国土強靱化を図るとともに、廃棄物を極力出さずに、資源を無駄なく使用続ける、循環型社会を目指しています。

そして、これらの社会変化や技術の発展などが、これまでの日本の産業・市場構造を変え、地域社会においては、エネルギーなどの分散型の社会基盤を発展させ、環境や防災など社会課題を解決するグリーン経済社会を構築させます。

また、デジタル経済圏が発展することにより、生活の変化とともに、政府や自治体の役割も変化する可能性があります。既存のサービスの効率化が図られ、国際的なルールに基づくデジタル経済圏の環境整備が、国民・住民の格差是正など、様々な面で大きな役割を果たすことになるでしょう。

社会の変化、先端技術の活用

2050年の社会では、暮らしを便利にしたり、産業を発展させたり、社会基盤を維持したり、自然環境を守るための技術が進歩し、社会問題が解決したり、さらなる技術革新が起きることも予想されています。そこで、未来展望の検討にあたっては、以下に示すような変化も考慮します。

医療、介護

- ・遠隔診断が進む
- ・遠隔手術が可能になる
- ・薬、治療も進歩



医療、介護サービスが受けやすくなる

医療環境の拡充が図られる。

ロボット、自動化

- ・産業にロボットが普及
- ・介護にも普及
- ・行政サービスも自動化



ロボットが人の代わりをするようになり効率化や省力化が進む

建設、医療、行政、農林水産業、物流、交通や社会基盤の維持管理の担い手不足が緩和される。

人、物の移動

- ・車が空を飛ぶ
- ・自動運転になる
- ・ドローンが物を運ぶ



移動効率が高くなり、電化で脱炭素が進む

域外から人が来やすく、また、域外に出やすくなる。空から様々な体験が可能になる。救急搬送や災害時の対応が効率化する。

食の変化

- ・1次産業が効率化
- ・養殖が増える
- ・新しい食べ物が登場



脱炭素の必要性からも食の内容が変化する

栄養摂取の多様化とともに、農水産物の価値が高まり所得が向上する可能性がある。(農水産物に付加価値がつけやすくなる可能性がある)

情報通信、人口知能

- ・通信、計算が高速化
- ・仮想空間で現実世界のようなことができる (デジタルツイン)



他の様々な分野に技術革新をもたらす

災害対策の実効性が向上する可能性がある(適応)。エネルギー効率が高まり、CO₂の排出削減が進む(緩和)。遠隔操作や仮想空間に居住することで、域外で住民生活が送れるようになるなど

人生100年時代と地域マネジメントを強化

2050年に向けては、デジタル技術により距離や言葉の壁を越えられるようになったり、生命に関する知見の発達や、技術が進歩して健康寿命も今より約7歳伸びる可能性があります。健康寿命の延伸は、社会保障支出が増加するため、人生100年時代を支える財政・社会保障制度が不可欠です。AI・ロボット化により、労働市場の垣根がなくなる可能性が高まる一方、過度な経済格差が生まれる可能性もあり、それを是正するために、社会のニーズに応じた個人の継続的なスキルアップが必要となります。

デジタル技術が普及した社会では、地方の中核市などに人口が集積しやすくなるかもしれません。市町村の特性に応じた機能分化と連携により、行政サービスの効率化・高度化とともに、個別市町村の強みを発揮し、地域の魅力を高める相乗効果が期待できます。

多様な価値観を認め合う社会へ

デジタル技術や技術革新の浸透により、利便性の向上など企業や個人の生活は大きく変わるでしょう。一方で、少子高齢化社会において、経済格差、教育格差、健康格差などの社会格差の増大が懸念されます。こうした社会では、多様な価値を認めあう、利他の精神をもって、互いに力を合わせて助け合う社会を構築しなければなりません。

このような激動の中で、これまでの生産人口に分類される人々だけではなく、高齢者、女性、子供・ユース、障害者、外国人、また、集落間、町外間など、瀬戸内町の社会を形成する、すべての人々がともに手を取り合う社会が、瀬戸内町の描く「せとうち未来展望2050」です。

3. 瀬戸内町の未来展望

(1) 未来展望の考え方

町民の想い

町民から寄せられた意見を集約すると、次のようなことが言えます。

- ・美しい自然や文化に対する想いが強い。そこに瀬戸内町ならではのユニークな価値がある
- ・集落機能の維持や、人々が世代を超えて支えあう、つながりを大切に思っている（この「つながり」は、ともすれば同調圧力の源にもなるため、ゆるやかさがあることも大切だと思っている）
- ・移動手段等の制約があり、人や物の往来、情報交換・共有が不便であっても、ほっとする場所、時間を忘れられる場所としての価値を見出している

町民の想い:ワーキンググループのまとめ

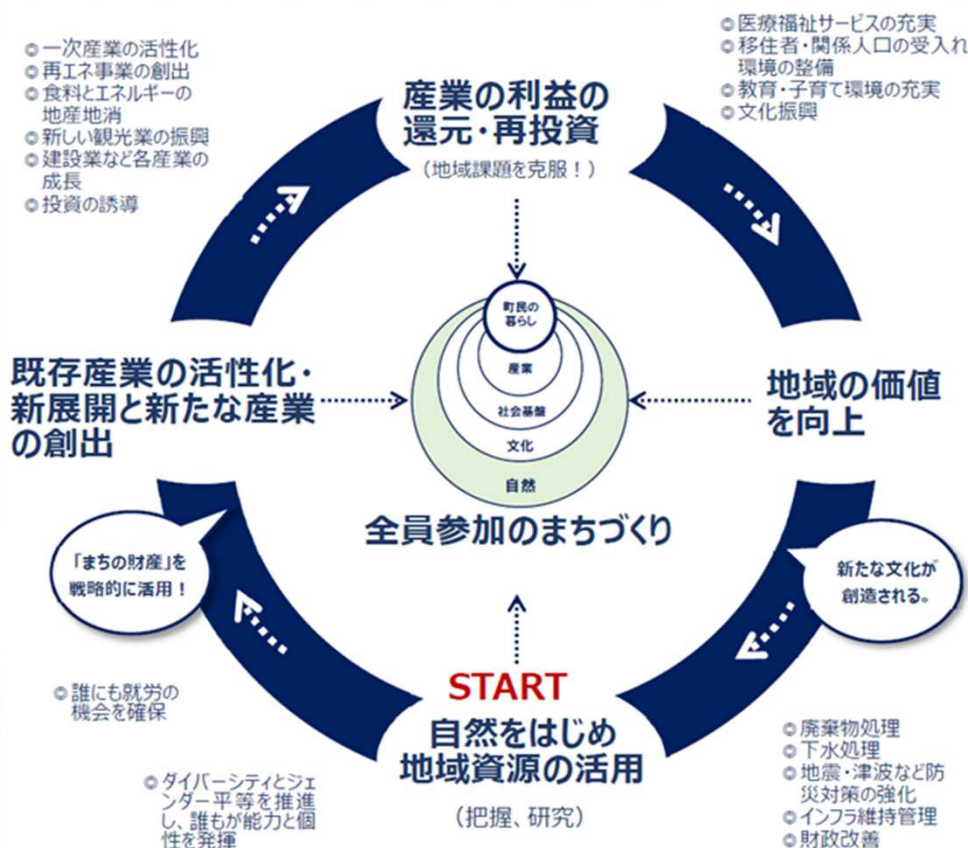
私が描いた2050のDREAM Action MAPの目的	想い	最初のアクション
「町として存続し続けたい、瀬戸内町であり続けたいコト」	もう全員が一丸となっていかなければという危機感	瀬戸内町ですでに実践しているチャレンジを洗い出しておいて、それだったらココでできるよ！と世界にPRするコト
このシマでは時間を忘れよう	このシマでしか経験出来ない事	当たり前にある自然を体験し、伝えること
観光教育そして移住と定住	持続可能な観光をするために自然のことを考える人とそして定住促進	そのために観光協会に予算を付けてもらえるようにする
このシマでは時間を忘れてしまう	あつという間に時間が過ぎる	時間にとらわれずに動こう
○縁宴 泣く子もだまる瀬戸内町を維持すること	人口を維持する、Uターン、Iターン促進したい気持ち	個人：雇用をうむために仲間と話す。集落：空き家を貸すよう願む。町：アパートを建てる
安定食の確保いざい安定に観光	外部からの関係	自然に恵まれた観光
繋ぐ。そして創る。	今までのもの。未来のもの	まずはやってみよー。
人と繋がり皆が楽しく暮らすこと	町中のみんがが友達	子どもの居場所作り、充実
気温も暑い、人の心も熱い、ほっとする町にすること	あついホットな	
クワマガに繋ぐ希望溢れるシマ『子供の笑顔、大人の夢』	今があたり前じゃない！町全体で持続可能な意識を！	理想の未来を描き、共有できる場作り
瀬戸内町あたたかすぎて逆にこまる	充実したシマ	お店（飲食店・スーパーなど）が増える
いのち（生命）を感じれる町 クワマガに残そう みんなの田舎 瀬戸内町	今に感謝し、これから大切に生きる	子どもたちから教えてもらう『大人が生徒授業』
海と生き残るシマ	未曾有な世の中でも心身共に健やかに生きていきたい気持ち	ヨガやダンス、エクササイズでシマの方の健康をサポートする
熱い暑い厚い瀬戸内町	人と人の繋がりを大事にすること、自然を残しつつ町を発展させていくこと	ロボットに負けない
気候だけじゃないあたたかさ	人のあたたかさや ふるさととしてのあたたかさ	シマのイベントに参加する
まだ知られていない『夜の自然』を売りにして将来の豊かさの基盤を作る	星空・夜光貝・ホシゾラフグ・ザトウクジラ・カメが揃うのは奇跡的。ダークスカイでそれをパッケージ、新しい価値を提案	国際ダークスカイ協会の登録。その挑戦
『不便』だからこそ『不変』	町の良さを残しながら、発展するべきところはさせたいという想い	瀬戸内町ブランド開発への挑戦
世話好きバアバが多くなるシマ	じいじとばあばが元気なマチ	土曜日19時公民館で（お茶お菓子）ばあばの飲みにケーション
56人のばあば	地域の存続、ばあば（じいじ）から元気に！	シマ案内
生涯現役で活躍できるまちの実現	地誰にとっても出番と居場所があり、誰一人取り残さないこと（一人ひとりを尊重し、その個人と能力を發揮	ITばあば育てと健康づくり
私が作る多様なまち	まちを作るのは、まちに住む人	私が作る多様なまち

将来像から逆算していく

町民は、自身の足元に広がる自然に価値を感じ、人々とのつながりを大切に、自分達の町が安心できる、帰ってきたくなる場所であってほしいと願っています。そこで、未来展望を描く上で、町民の思いから、自然や文化をうまく活用し、多様な価値観があることをお互いが認めながら、人々が手を取り合い、暮らしが安全安心で豊かであることを地域の理想の姿としました。2050年にこの町の主体になるのは、現在の20代以下の若者とその子供たちです。したがって、そのときの町民全体の生活が安全安心で豊かになることを目標に設定し、医療や介護を受けやすく、またしやすくなっていたり、働きやすくなっていたり、集落や町の人々のつながりが維持されていることを瀬戸内町の「あるべき姿」としています。あるべき姿の詳細は、17ページ以降の7つの将来像で示しています。

まちづくりのサイクルを確立しよう

町の将来のあるべき姿を実現するために、「まちづくりのサイクルを確立する」ことが重要です。自然保全や地域資源の活用、産業の創出や効率化、そこで得られた利益を暮らしの向上に投資する、そのようにして魅力が高まる地域に人々が住みたくなり、新たに創造される文化・産業がさらに町の価値を高めていく、この循環を回していきます。



人と海と山を育み、活かし、つなぐ 瀬戸内町

育む、活かす、つなぐ

町民の代表と役場職員によるワーキンググループなどで示された、大切にしたい言葉が「育む、活かす、つなぐ」で、住民が思う瀬戸内町の資源は、森、海、山が挙げられ、それらを組み合わせて「人と海と山を育み、活かし、つなぐまち」を、未来展望のスローガンとして掲げました。そして、瀬戸内町のあるべき姿の7つの将来像は、このスローガンを念頭に置いています。

(2)瀬戸内町のあるべき姿:7つの将来像

- ①みんなが安心して暮らし、それぞれに合った働き方をしている
- ②森、海、文化を活かした学びに取り組み、地域を担う人材が育っている
- ③町を挙げて、地域資源を活用した産業を創出し、価値を高めている
- ④移動がしやすく、化石燃料に頼らない、災害に強いまちづくりを進めている
- ⑤伝統・文化を大切にしながら、教育や観光に積極的に活用している
- ⑥美しい自然を大切しながら最大限に活用し、様々な人が訪れている
- ⑦町全体を便利に、人、物、情報をつなげて集落を維持している

みんなが安心して暮らし、それぞれに合った働き方をしている

目指す町の姿

**みんなが病院にかかりやすく
安心している**

- ・遠隔医療を活用して、どこにいても医療サービスを受けられる。
- ・ドローン等を活用した人や物の移動手段の進歩に伴い、緊急時に病院に行きやすく、また、必要なものが届きやすい。
- ・産婦人科・小児科の医師が常駐する病院にかかりやすく、出産や子育てがしやすい。

**必要な介護が受けられ、
みんなが健康に暮らしている**

- ・介護サービスが充実していて、必要な時に必要な介護が受けられる。
- ・運動能力をサポートできる機器や脳機能を活性化する先端技術を活用して、支援が必要な人が減っている。
- ・高齢者と子ども達と一緒に活動できる場所、施設があり、住民同士が適切に扶助しながら、孤独、孤立を防ぎ生活の維持、向上を図っている。

**みんながそれぞれにあった働き方を
して、安心して子育てをしている**

- ・家事、介護、子育てが分担され、町民それぞれにあった働き方ができ、特に、女性が働きやすく、子育てがしやすい。
- ・多様な性の形があることを認め、お互いが尊重しあい、町民が自分に応じた役割を認識し、自分らしい生き方をしている。
- ・女性の政治家、企業家、管理職が町の運営に多く関与し、介護、医療など女性に偏りがちの仕事が分担されている。

森、海、文化を活かした学びに取り組み、 地域を担う人材が育っている

目指す町の姿

子供が自らいきいきと学び、 シニアが活躍している

- ・個別最適な学びと協働的な学びが一体となった、新しい学びを可能にする魅力ある学校施設が整備され、学校や生徒がやりたいと思うことに取り組んでいる。
- ・各集落の文化の伝統を継承し、環境を守り、地域に貢献できる人材が育っている。
- ・シニアが進んで学んでいて、様々な学びの場で講師役やガイド役になっている。

森、海、文化を積極的に活かした教育に取り組んでいる

- ・幼少期から自然に触れ、森林、海岸、遺跡、戦跡等文化財などの地域資源を活かした学びの場に多くの町民が参加している。
- ・農林水産業や、地域資源を活用した観光業について生徒たちが学び、地域を担う人材として育っている。
- ・地元の高校で、生徒たちが自治体経営や観光業、水産業などを学び、地域を担う人材として育ち、域外の人々とも交流している。

町外から人々が瀬戸内町に 学びに訪れていて、研究開発 にもチャレンジしている

- ・留学支援の制度も活用して、町外から多くの人々が瀬戸内町に学びに来ていて、町の人々と交流している。
- ・町内外の企業や研究機関が連携し、共同研究や開発が進んでいる。
- ・出前授業やデジタル空間で、生徒たちが先端研究や先端技術に触れ、学びを得ている。

町を挙げて、地域資源を活用した産業を創出し、価値を高めている

目指す町の姿

カーボンニュートラル推進に伴う産業振興がなされている

・再生可能エネルギーや電気自動車など新しい技術導入など脱炭素社会への移行により、地元の事業者が新たな利益の源泉を獲得していることで、雇用創出と所得向上が図られている。

地域の自然が保全される農林水産業が育まれている

・デジタル技術やロボットを活用し、農林水産業の省力化、効率化を進め、自然資源の保全や安全性の向上が図られ、高品質な農林水産物を生産している。

地域を資源を生かした観光業が盛んになっている

- ・農林水産業の後継者が育ち、デジタル空間で瀬戸内町を体験する人も増え、農業と観光で関係人口が増加して町全体が盛り上がっている。
- ・森、海、文化を最大限に活かした持続可能な観光を、新たな町の産業としてみんなで盛り上げている。運輸、建設など関連産業も活気がある。
- ・観光業に従事する人々や宿泊者のために、住居のリノベーションや、空き家、空き店舗の有効活用を進めている。

町を挙げて、地域資源を活かした事業創出や起業にチャレンジする人を応援している

- ・瀬戸内町に居住しながら、新たなカーボンニュートラル産業、農林水産業、観光業に従事し、デジタル空間で町外の仕事に従事している人が増えている。
- ・一時的な滞在者が利用できるサテライトオフィスがあり、そういった拠点で、人々が地域資源を活かした事業創出をしている。そして、起業にチャレンジする人を官民が連携して支援、応援している。

移動がしやすく、化石燃料に頼らない、 災害に強いまちづくりを進めている

目指す町の姿

人、物の移動を簡単にできる ようにしている

- ・ドローンを中心とした先端技術を活用して、人と物の移動が簡単にできるようになり、空港と瀬戸内町の往復もしやすくなっている。
- ・医療施設にもアクセスしやすくなり、フェリーの欠航が長期化してもライフラインの確保や医療物資の搬送、貨物輸送を実現している。
- ・人と物の移動のしやすさを活かして観光業を振興し、町ににぎわいをもたらしている。

化石燃料を使わずに、社会基盤の維持管理をしている

- ・家庭、事業所などに再生可能エネルギーが最大限導入され、安定に供給されている。
- ・再生可能エネルギーと蓄電池が普及し、分散型のエネルギーが非常時の電源として確保されている。

災害時に命が助かる町づくり を進めている

- ・町内外の機関と連携し、想定外の異常気象による災害が起きても、町民や訪問者の命が助かるまちづくりを進めている。
- ・異常気象に備え、デジタル技術を活用してのシミュレーションや、ドローン等の先端技術を活用し、気候変動の適応対策がなされ、そのための人材育成に取り組んでいる。

文化・民俗を大切にしながら、 教育や観光に積極的に活用している

目指す町の姿

人々が町の歴史や文化に考えをめぐらし、伝統・民俗をつないでいる

- ・町民が、琉球と薩摩の文化が融合した、島独自のアイデンティティに対する認識、理解を深め、民俗を継承している。島唄、三味線、八月踊り等、伝統文化を次の世代に伝え、大島紬の技術の継承を進めている。

文化・民俗を貴重な地域資源として大切にしながら、教育や観光に積極的に活用している

- ・埋蔵文化財や遺跡の把握を進め、開発行為に際しても適切な保全措置を講じている。そして、数ある埋蔵文化財、戦跡を民俗とあわせて貴重な地域資源として活用し、教育、観光の価値を高めている。
- ・町と島にある独自のものを見る、学ぶ、感じるために多くの人々が来島しているが、オーバーツーリズムにはなっていない。
- ・十五夜（註：稚児の土俵入り、子供・大人達の相撲）をはじめ、子供と大人がともに楽しめるイベントを開催し、町全体を明るくしている。

島全体で調査研究や交流を進め、より深い理解を得ながら新たな文化を育てている

- ・瀬戸内町だけでなく、島全体の文化、民俗を保全、活用すべく、調査研究や交流を進め、国内外の近代遺跡を有する自治体および研究者との情報共有や、調査・研究成果共有を進めている。
- ・このような交流を進めることで、さらに文化・民俗の保全や継承を図り、教育や観光の価値をますます高めている。

美しい自然を大切しながら 最大限に活用している

目指す町の姿

自然環境が守られ、行動を起こす意識が根付き、仕組みが整備されている

- ・水洗化の促進、生活排水処理の適切運用、浄化槽を普及している。
- ・プラスチックなどの資源ごみがリサイクルされ、廃棄物が資源として活用されている。
- ・農林水産業の基盤、エネルギーを生み出す場、教育の場、癒しの場、観光の場として、美しい海を教育や産業に最大限に活用している。
- ・文化、民俗と自然環境とのつながりを町内外の人々が理解し、それらの保全や開発に向けた意識を高めている。

山、森の豊かな生態系が保全され、海の生態系が回復し、維持されている

- ・町民が気候変動に対する海の役割を理解、共有し、二酸化炭素の吸収源である、マングローブ植林や藻場の再生ができており、海洋資源が復活している。
- ・山や森の資源が保全され、木質バイオマスの供給や二酸化炭素の吸収源となるだけでなく、海の生態系の維持が図られている。

自然を求めて、様々な人々が訪れたい、魅力的な町づくりが進み、町民がいきいきと暮らしている

- ・施設、情報や人が集まる地域と、自然と何もないことの価値（古くからの文化・民俗）を大切に保全している地域を分け、ごみのない美しい、メリハリのある魅力的な町づくりを展開している。
- ・自然環境に関する調査研究、教育、レジャーや自然と文化・民俗とのつながりの探求など、様々な目的で国内外から人が訪れていて、質の高い経済が創出している。

町全体を便利に、人、物、情報をつなげて集落を維持している

目指す町の姿

町民の暮らしの向上のために投資ができる財政力を持っている

- ・新しい産業の創出や高付加価値化、土地の適切な活用により地域経済を活性化させ、町の財政を健全に保っている
- ・先進的・先駆的事業に投資できる余力が生まれていて、災害等の緊急時にも対応できている。
- ・危険家屋の解体や、港周辺を美化し、空き家を活用した住居の整備を進め、民泊や移住体験場所として利用できるようにするなどして、観光業を振興している。

行政の手続きが簡単にできるようになり、町民の負担が軽くなっている

- ・デジタル技術を活用し、医療、介護、福祉、教育、買い物、産業活動など町全体で様々なことを便利で簡単にしている。
- ・行政手続きの効率化も進めて、町民の負担を軽くし、遠くにいても住民生活が送れるようにしている。
- ・デジタル空間を通じて瀬戸内町と関係を持つ町外の人が増えている。

人と物と情報のつながりを活かして集落の維持や地域の課題解決に取り組んでいる

- ・先端技術も活用し、人、物、情報がつながる力を高め、住民同士が支えあって集落を維持し、地域の課題解決に取り組んでいる。

【未来展望の概説（2050年の世界と瀬戸内町）】

世界や日本の未来展望と瀬戸内町の7つの将来像

世界や日本の未来展望と瀬戸内町① 日本の持続可能なコミュニティ

推計によれば、2050年ごろ、日本では、高齢者一人（65歳以上）に対して生産人口一人（15歳から64歳）がケアしていくことになり、自立生活が困難な住民が増えれば、特に女性が主に担っている医療、介護、子育ての仕事は全員でやっても足りません。

そのため、自立支援で高齢者が生活の質を維持し介護者の負担軽減のためのロボット、AIを活用した技術などが医療、介護、子育ての分野で進みます。

ITが義務教育となり、男女ともに将来世代一人一人がIT化された社会や暮らしの人材になっていきますが、2050年に向けて、若い女性の比率が上がり、いかに将来世代の生産年齢人口を維持するかがカギとなります。女性が、地域や町づくりの担い手となり、出産、子育てに優しい地域が構築されることで将来世代がその地域の未来を考え、支えてくれるようになります。

経済基盤である産業があり、女性が働きやすく、子育てしやすい、住みやすい瀬戸内町は、生産年齢人口を維持することで持続可能な地域となるでしょう。

そして、瀬戸内町を持続可能な町にしていくため、病気予防・老衰予防を行い、健康寿命を伸ばし、自立した元気なお年寄りが増え、医療や介護の負担が少ない町にし、お年寄りが生涯現役となり、自分ができることをやり続け、社会の一員を構成するような町となるでしょう。

世界や日本の展望と瀬戸内町② デジタル時代に必要とされる人材

2050年において語学では中国語、ヒンディー語（インド）、英語などが台頭し、また、科学技術ではAI（人工知能）が発達して、あらゆる学問や分野で人間の知能を超えるという予想もあります。

一方で、これまでの教育で費やす時間を他の能力の向上に使うことが可能となります。

例えば、地域によって存在する資源や求められるインフラが異なるため、その地域での未来を創造し実装する能力などです。特定の産業、文化が重要な地域であっても、それを探求し表現し発信できなければ価値として伝達できずAIの能力の発揮はありません。

自動運転などの新たな地域インフラが導入されても、それらを運用できる人材が必要であり、瀬戸内町における浸透やサポート、地域外の関係者とのパイプの構築できる人材が不可欠です。

瀬戸内町は、海と山の自然資源が豊富であり、かつ、特有の文化、民俗と歴史を持っており、町民もその価値を大切に思っているというアイデンティティの高さがあります。アイデンティティとは、「自分らしさを認識している」ことです。

瀬戸内町において、何が好きか、何が必要かを意識し、それに必要な知識と経験をインプットすることにより、将来の瀬戸内町ビジョンの実現に寄与する人材を育みます。

世界や日本の未来展望と瀬戸内町③ カーボンニュートラル、自然資源保全による新たな産業・経済

2050年はカーボンニュートラルの社会がきたとしても気温は産業革命時から約1.4℃上昇しています（カーボンニュートラル社会にならなければ約4℃上昇するという予想があります）。異常気象は多発し自然環境が変わり、これまで重要とされていた資源や価値が変わり、人間の生活も合わせて変化させなければ生存できません。また、日本は大国に囲まれる島嶼国であり、生存に必要な、エネルギー、水、食料を確保して行くことが不可欠です。水が豊富な日本では、エネルギーと食料をなるべく輸入に依存せず、必要な栄養素を地産地消により安定供給することができる可能性があります。ただし、日本の各地域で完全に地産地消ができるとは限らず、地域間の依存関係が必要な地域もあります。

グリーンエコノミーとは、二酸化炭素の排出量をゼロにして生物多様性を保全し、ブルーエコノミーとは、海洋生態系の健全性を維持し海洋資源を持続的に利用し、人間の生活を向上させることを言います。

グリーンとブルーの双方を持ち合わせる瀬戸内町は、新たなビジネスや産業を創り出し、日本にとって重要な役割を持ちます。技術進化により人材不足を補うことができれば、自然資源と高いアイデンティティを持つ瀬戸内町は、将来に対して持続可能な発展性を持ちます。

世界や日本の未来展望と瀬戸内町④ 想像を超える社会基盤の変容

カーボンニュートラルを達成し、AIなどの先端技術が進化した社会では、人口や経済が地方にも均一に分散され、分散型社会の構築が進む可能性が高まります。その時、交通網、送配電、港湾、通信、病院、学校、住宅や医療・福祉などは、これまでと違う自律分散型のものになる必要があります。これまでの社会基盤整備は、過去に描いた未来社会を目指し時間をかけて行われてきました。2050年の社会基盤整備も、その時に急進に行えるものではなく、やはり、長期視点で変化させていくことが重要です。例えば、有人ドローンや自動運転モビリティは、人の移動、輸送、物流を変化させ、空の路の開発により、瀬戸内町へのアクセスは改善するでしょう。そして、ロボットの活躍などにより、人口が少ない状態でも経済を回していけるようになります。また、再生可能エネルギー、小規模分散型の水供給・処理サービス、遠隔医療や教育のためのネットワークなどが実装され、他地域に過度に依存しない自立分散型の安全、かつ強靱な社会となります。

将来から逆算して、今から準備を始めることのできる瀬戸内町は、そのような社会基盤の整備を実現することができます。

世界や日本の未来展望と瀬戸内町⑤ AIと人の違い:文化形成力の源「自分らしさ」

AIなどのテクノロジーが進化した社会において、人間には何が好きか、何が必要かを意識し、それに必要な知識と経験が重要になってきます。それらの認識には、何が大切かの自身の価値観を持ち、自身のアイデンティティが欠かせません。

そして、その大切なものを持つ環境やコミュニティに身をおくことでアイデンティティは養えるといわれます。したがって、現状、瀬戸内町で当たり前のように思っている価値であっても、テクノロジー社会において、ますますそのような環境やコミュニティが重視され価値が向上するでしょう。

文化、民俗と歴史などの価値は一朝一夕で構築されるものではなく、その価値を保全し、継承し、表現し、地域外にも発信し、価値として伝達していくことにより、2050年により強靱な地域となりえるでしょう。

したがって、独自の文化、民俗と歴史など悠久の蓄積に対して重要な取組とし、その価値の発掘や追求できる環境構築が重要であり、それが瀬戸内町にとって絶大な地域資源となりえます。

世界や日本の未来展望と瀬戸内町⑥ 地域循環共生圏

2050年には、世界、国全体がカーボンニュートラル社会で、AIなどの技術が進化し、異常災害に適応した社会となるでしょう。そのような社会において、地域に不可欠なのは、地産地消のインフラ（基盤）、自然資源とアイデンティティといわれます。気候変動の影響を低減させ、人間の幸福および生物多様性による恩恵を同時にもたらすための、生態系の保護、管理、回復をさせることができる地域を「地域循環共生圏」といいます。カーボンニュートラルの実現で、再生可能エネルギー、食料、水を含む資源を地産地消し、ごみも資源として、すべての資源を無駄なく活用する社会の実現を意味します。

自然資源は、そのままおいておくだけでは保全できず、人が自然とバランスのとれた管理、活用を行う必要があります。たとえば、農林水産業の生計と、生物多様性、気候変動の対応は、時折、トレードオフ（何かを得る時には、何か別の物を失う）が起こります。

グリーンやブルーエコノミーを構築することによる持続可能な観光や、そのためのコンテンツ開発、人材育成や教育産業の開発などがその手法のひとつになるでしょう。そうすることにより、ごみを資源として活用し、自然や生物多様性の損失に歯止めをかけ、環境にとってプラスの状態となりえ、さらに瀬戸内町が強靱な町となります。

都会に行かなくても、世界に通用する高等教育が受けられ、AIを伴う自動通訳・翻訳により「言葉の壁」がなくなり、自然資源や文化を生かした観光、エンターテインメント、教育、体験など新たな価値を地域内外の人々に提供できるようになり、様々な人が瀬戸内町を訪れるでしょう。

世界や日本の未来展望と瀬戸内町⑦ 未来の町と行政

2050年までには、戦後からこれまでに経験してきた道筋の延長線上にない、新たな社会を作る変化やシフトが起こることが予想されます。

それらの変化やシフトとは、① デジタル化や先端技術による生活やインフラの変化、② 経済大国の位置づけの変化、③ 脱炭素を実現する循環型社会へのシフト、④ 多様な人や価値が共存する社会へのシフトなどが挙げられ、日本全体の社会や経済のみならず、各地域にも大きな変化をもたらします。

例えば、デジタル技術が浸透すると、仕事、買い物、医療、金融のために移動しなくてはならないことが減り、人材不足の地域において行政サービスが効率化・高度化し、住民の利便性が向上するだけでなく、行政職員がいきいきと働き、地域の力を強化できるようになります。

このような変化を起こせる瀬戸内町は、独自の未来像を持ち、多様な人々や価値を受け入れ、住民同士が支えあいながら、日本という共同体の重要な一役を担っていきます。その担い手になるために、2050年のまちづくりを町全体の共同作業として取り組んでいきましょう。

4. 実現に向けて

未来展望の実現に向けて今必要なこと

- 1) 町民一人一人が、未来展望を自分事化する仕組みを作ること
- 2) 官民協働による推進体制を作ること
- 3) 地域資源の保全と活用の仕組みを作ること

そして、町民と行政が常に議論をし続け、社会の変化に合わせて、この未来展望を見直していくことが重要です。

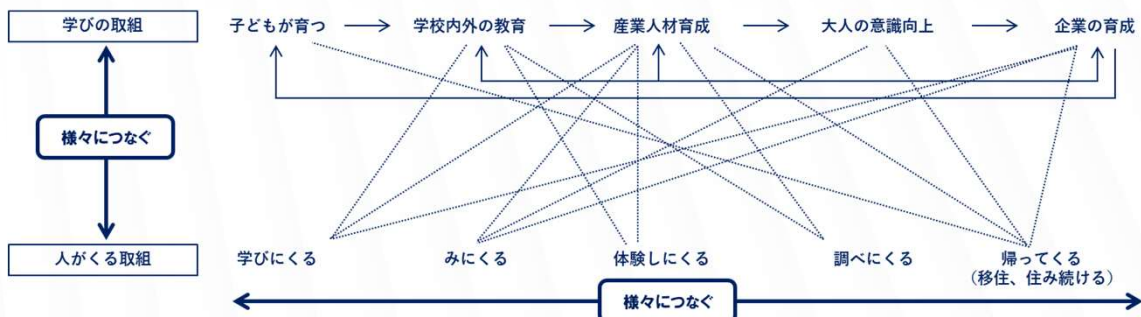
様々な“学び”を取り入れていこう

本構想では、瀬戸内町の未来展望を描き、育み、活かし、つなぐ様々な取組を挙げながら、7つの将来像を示しました。この未来展望に向かって、町が変化、変貌を遂げていく上で、一つ鍵になりそうなことに「学び」があります。

いかに町民の暮らしを豊かにするか、産業を振興して雇用を創出していくか、そのための人材をいかに育成していくか、そして、島が、日本が、世界がどのような変化に直面していくか、少し先のことを見据えて学んでいくことがとても重要になると思われます。

そして、この「学び」自体が産業になる可能性もあります。瀬戸内町の森林、海洋、文化・民俗には、日本の、世界の人々にとって魅力的な学びの対象が溢れています。地域資源の有効活用は、「学びの推進」にあるかもしれません。

学びが活発化することで瀬戸内町に来たくなり、帰って来なくなり、楽しいことは長続きするので、「住み続けたい町」が実現するかもしれません。



参考資料

本構想策定にあたって、各種基礎調査、アンケート、ヒアリング、中高校生を対象とした未来ワークショップ、町民の代表によるワーキンググループなどを実施しました。調査結果等については、資料編にまとめ、瀬戸内町役場ホームページにて公開しています。

せとうち未来展望2050 (せとうちみらいてんぼうにーまるごーまる)

発行日 2024年3月
発行者 瀬戸内町
〒894-1592
鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋船津23番地
TEL：0997-72-1111 FAX：0997-72-1120
